

福島県飯舘村における農地除染と農業再生 (5月23日 溝口先生)

1. はじめに

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故により被災した福島県飯舘村での、溝口教授の農業再生の取り組みに関する記事を読み、私自身ができそうな被災地の農業再生について考察する。今回選んだ記事は、①「飯舘村に通いつづけて約8年－土壌物理学者による地域復興と農業再生」(コロンブス 2019.5)と②「農業農村開発の技術を考える」(ARDEC 第60号, 2019年3月)の2つである。

2. 記事①「飯舘村に通いつづけて約8年－土壌物理学者による地域復興と農業再生」

この記事で最も印象深かったのは、「大学と研究者の使命と役割を問い直す」の部分である。その中に「現場主義」とあるが、これこそが被災地の農業再生における最重要事項なのではないかと感じた。飯舘村での取り組みは、当初はなかなか現地の人々と通じあえず苦労したこともあったとのことだが、そうした困難を乗り越え今では一体となって活動を進められているのは、支援して「あげよう」という一方的な態度ではなく、自分自身も当事者となり、協働しようとする姿勢によるものだろう。紹介した技術がどれほど優れていようとも、こうした姿勢なしには円滑な遂行は望めまい。

また、「単一分野の専門家だけでことに当たろうとする姿勢」に対する問題意識についての記述もある。これも、究極的には先に述べた支援して「あげよう」という態度と関わっていると思う。どんな問題に関しても、実際に現場を見てみると、自分の分野がいかにか「ほんの一部」に過ぎないかが見えてくるものである。徹底した現場主義に基づいて、現場の実情を見に行けば、「自分の技術を現地の人にどう利用させるか」ではなく、「自分の技術が現地でどんな風に活かせるか」という風に考えるようになるだろう。

講義の中で、農業再生のためのハード面の開発・改良の例の他に、新たな特産物としての日本酒やワイン造り等の計画、子どもたちへの教育など、多様な取り組みが紹介されていたが、これらは一見、互いに独立した活動のように見えながらも実際は被災地の今に寄り添い、未来を共に創っていかんとする姿勢を共有しているのだと気付いた。

3. 記事②「農業農村開発の技術を考える」

記事①にもあった「現場主義」が記事②の主題である。日本国内だけでなく、海外において何か取り組みをする際も、現場主義が非常に重要であるという。

余談になるが、科学者や科学的知、またそれらと社会との関わりなどを分析対象とした文化人類学研究というものがある。それによれば、自ら現場に赴いて現場の声を聞き、本当に求められていることを見極めて行動に移すという姿勢は、農業関連の開発のみならず、科学知や技術を実社会に応用するすべての場面において重要である。「学問」の場で生み出された科学的知は、科学者集団といういわば1つの「村」のローカル・ノレッジであり、必ずしも普遍的ではない。科学的知を応用しようとしている場所、例えば今回の例でいうと東南アジアのある地域も1つの「村」であって、そこに住む人々は経験的に得た知識などをローカルノレッジとして共有しているだろう。その場合、他所から来た科学者と現地の人との間にはそれぞれが持つ知識の衝突が生じる。こうした時、実際に技術を使うのは現地の人々であるというこ

とを考えると、科学者の側が現地の風土や文化、現地の人々の望みを把握し、それにあった提案をすることが必要になる。記事の中で『ここに最新技術を導入したら、農村はどう変わるのか』『この子供たちの生活は、どうなるのだろうか』『この技術を普及させることが、地域社会にとって、本当に良いことなのだろうか』と、畏れのようなものをいつも感じた。』とあるが、もしも開発するべきでないと直感的に感じたり、あるいは現地の人々が開発を望まないと言ったりした場合には、短期的視点から見て最新技術の導入が「善い」ことのように思われても、あえて導入しないことが正解であることもあるだろう。

4. 「あなた自身」ができそうな被災地の農業再生

以上を踏まえ、「わたし自身」ができそうなことを考察する。前提として、「わたし」は東京の大学に通う文系の学生で、「社会の中の人、モノ、それらの関係」、学問でいうと法学や文化人類学に興味がある。

第一に、わたしは学生であるから、若い力を被災地に提供することができる。避難指示解除後もなお住民、特に若い世代がほとんど戻っていない飯舘村にとって、若い力が活気を取り戻すきっかけになることは確かだろう。第二に、わたしは文系の学生であって、人と人、人とモノ、それらを媒介する制度や法律、文化などの無形のものに興味がある。こうしたものの見方は、先に述べた「現場主義」と非常に関連が深く、「支援」の場面で見られることのある、一方的な姿勢とは対照的である。

これらのことから、わたしは被災地の農業再生において、「科学者と現地の人を繋げる」という仕方で貢献できると考える。具体的な設備の整備などについては直接貢献できないが、現地の様々なアクターに話を聞き、それを分析して「現地の人々が描く将来像」を明らかにして科学者側の人々に伝える。わたしのような存在が中立的な立場で両者の媒介となることで、より現場に寄り添い現実的に、かつより有効な取り組みになると期待できる。

現に農学部がこうした役割で活動しているそうだが、そこにさらに文系の学生も加わり、また違った視点を入れることで新たな化学反応が生じそうである。これはおそらく学生同士にとっても良いことで、農学部の学生にとっては自分の専門外のことについて考えるきっかけになり、将来の農業再生、農業開発を担っていく人々の育成という観点から好ましい。一方、我々文系の学生にとっては、将来社会のソフト面（法律や諸制度）の整備を担っていくことになったとしても、農業開発の実情を見た経験は役に立つ。こうして両者が成長していくことは、将来の農業にとってもプラスになる。

以上のように、一見出る幕がないと思われたわたしのような立場の人も農業再生の場に加わることで、短期的に見ても、長期的に見ても利点がありそうだ。今ある問題を解決することはもちろん、将来の農業の維持・発展につながる取り組みをすることが、究極の「被災地の農業再生」と言えるだろう。